父が築いた「おやき」文化を受け継ぎ育む幸せと誇りを胸に

有限会社いろは堂 取締役 伊藤園子氏

長野市鬼無里で郷土の味「おやき」を作り続ける「いろは堂」。その跡継ぎと言われながら育った重圧、頑固で無口な父への反発心、故郷への思い……一般企業で働きながら休日に家業を手伝う中で感情の変化を経た後、ご主人・宗正さんとの結婚を機に帰郷。現在「いろは堂」取締役として活躍する、伊藤園子さんの思いに迫ります。

■和菓子屋からおやき屋へ

昭和40年頃、小川村の和菓子屋「いろは堂」が鬼無里への移転と同時におやき屋に転向。これは二代目である私の父が、時代の変化をふまえて下した大きな決断でした。当時、家庭で食べる「おやき」を買ってまでして食べる方は少なかったため、なかなか売れなかった。そこで先代は「冷めても美味しく食べてもらえるおやき」を作るため、生地や具の開発に大変苦労したそうです。

■父の背中と伴侶のひと言

私自身は、若い頃は後を継ごうだなんてまったく考えてはおりませんでした。というのも、幼い頃から跡取りとして愛情を注がれつつも厳しく育てられ、父への反発心があったのです。それでも休みの日くらいは、と県外から手伝いに戻ると、職人気質で無口な父が何度断られても毎日必ず小売店に出向き、おやきを置いてもらえるよう頭を下げていたのです。その背中には、さすがに胸に込み上げるものがありました。ちょうどその頃お付き合いをしていた主人に、ふと家業のことや父のこと、そして自分の思いを素直に話してみたのです。すると主人は「素敵じゃないの。一緒にやってみようよ」と言ってくれたのです。その時初めて長野に帰ろうと思えました。

■最高の仲間とともに

九州出身の主人は、美しい自然に囲まれた鬼無里を愛し、「いろは堂」のおやきの魅力を理解し、それを広く伝えようとどんな時も前向きに努力してくれました。そんな主人のおかげで、以前はあたり前過ぎて気付けなかった郷土の美しさや身近な人たちの温かさに気付かされ、そこで育まれる「おやき」の真の魅力を知るようになりました。さらに、そんな私たちを支え、会社を盛り上げてくれるスタッフにも恵まれました。

家族同然の思いで頑張ってくれる彼らがいたから、先代が苦労して築き上げた「おやき」文化を今に引き継げたものと感謝しています。だからこそ、彼らと心通う関係を築き、伸び伸びと働いてもらえる環境づくりに力を注いでいます。

■一生懸命に、心を込めて

東京などに物産展で呼ばれてもまったく売れず、節約のために父と車中泊するなど本当に苦しい時期がありました。それでも、父を喜ばせたいという思いとお客様の「美味しかった」のひと言に救われてきました。商売に楽な日などありません。でも、一生懸命に取り組んでいれば、報われる日が必ず来ると、私は信じています。

3年前、息子さんの拓宗さんが妻の友香さんと共に帰郷。彼らの若い感性と力添えが、新たな挑戦を後押ししてくれている。「感謝の気持ちを忘れずに、先代の信念を受け継ぐことが第一です。そのうえで時代ごとの変化を受け入れ、成長し続けたいですね」と、目を輝かせる。

伊藤園子氏（いとう・そのこ）
有限会社いろは堂 取締役

現在は1年の半分以上を「いろは堂バンコク店」（タイ）の切り盛りのため現地で過ごす。文化・風習が異なる海外への進出は苦労も多いが、本人は「予期せぬ病気療養の直後に与えられたチャンス」と前向きに捉え奮闘中だ。

次回は、株式会社黒船 村山幸造さんです